

石巻通信第7号（08年7月29日）

帆船「あこがれ」で石巻へ

高成田享

榎本武揚没後100年を記念して、榎本が幕府の艦船8隻を率いて江戸から蝦夷地に向かった航跡を帆船でたどる旅に私も乗船した。武揚のひ孫にあたる榎本隆充さんと『近代日本の万能人・榎本武揚』（藤原書店）を編集したのがきっかけで、この記念航海を知ったのだが、たまたま石巻を現在の活動拠点にしていなければ乗らなかったと思う。思わぬ偶然が重なり、東京から石巻までの3泊4日の帆船の旅を楽しみながら、蝦夷地に新天地を求めた武揚の思いを船上から考える機会を得ることになった。



新撰組の見送りで東京・有明埠頭を出航

7月13日午前、帆船「あこがれ」（大阪市所有、362トン）は、関東各地の「新撰組」同好会の人々による抜刀のエールで見送られ、東京・有明埠頭を出航した。武揚が幕府艦隊の旗艦「開陽丸」（2590トン）で品川沖を出発したのは1868年8月19日（陽暦では10月初旬）だから、140年前の出来事と

いうことになる。新政府軍の監視の目を逃れての脱出だけに、見送りどころではなかったはずだ。

明治維新となったこの年、徳川幕府は鳥羽伏見の戦いで敗れ、江戸も無血開城され、新政府への流れは定まった。しかし、武揚が統率する幕府海軍は新政府に対する「抵抗・牽制勢力」として、軍艦を引き渡さず、江戸湾に待機していた。そして、7月に主君の徳川慶喜が駿府に移ったのを見届けると、武揚は蝦夷行きを決断する。

「月の明るい夜だったという。深夜、子の刻、嚙唳（りゅうりょう）たるラッパの音が初秋の品川沖に冴え渡り、それに呼応するように各艦の煙突から濛々たる黒煙が立ち昇って月の光も曇るかと思われたが、やがて八隻の艦隊は舳舻相銜（じくろくあいふく）んで、静かに前進を開始した」（網淵謙錠著『航一榎本武揚と軍艦開陽丸の生涯』）

開陽丸の全長は72メートルだったのに対してあこがれは52メートルだから、ふた回り小さな感じだ。小さければそれだけ揺れも激しいと覚悟したが、浦賀水道を通過して、この日の停泊地点となった館山湾までは、波は静かで揺れも少なく、心配した船酔いもなかった。もっとも、のんびりする時間が少なく酔う暇もなかったのが幸いしたのかもしれない。あこがれは民間の客船ではなく、地方自治体の研修船ということで、私たち乗客16人も「トレイニー」（研修生）という身分。朝から夕まで、4人のボランティアを含む15人のクルー（乗組員）の指導のもと、さまざまな研修が組まれていて、なかなか忙しかったのだ。



「ホール・アウェイ」のかけ声でロープを引く

出航して最初の研修は「展帆」。クルーが発する「ホール・アウェイ」（帆を張れ）という号令で、トレイニーたちは「ツー・シックス・ヒープ」（2番、6番を引け）というかけ声に合わせて帆の付いたロープを引っ張る。運動会の綱引きの要領だが、相当な力仕事だけに、これはチャールトン・ヘストンのような筋肉もりもりの奴隷がやった仕事で、ひ弱な人間がやる仕事ではないなどと思う。張り終わると、クルーが「ビレー」という号令で、

ロープを船縁などにある真鍮のピンに巻き付けて止める。八の字を描くようにロープを3回ほどピンに巻き付けるとビレーは完成、余ったロープは「コイルアップギア」の号令で、丸めてビレーピンに架ける。

その次の訓練は「操練」。避難訓練のことで、緊急用のブザーが鳴ると、救命胴衣を持ってデッキに集合、救命胴衣は8時間は持つがあとは不明とか、救命用ボートに乗ったら水や食料を大事に使うようにとか、いろいろな注意を受けた。船上には緊急時の注意が書かれた板が貼られていて、汽笛の短音7回、長音1回は「退船」などと説明がある。映画「タイタニック」の場面が思い浮かんでくる。強引に連れてきた妻は泳げなかったことを思い出す。石巻に赴任してから半年、昨年末に遭難した沖合底引き船の漁船員の「合同慰霊祭」や、犬吠埼沖で遭難したカツオ巻き網船の漁船員の葬儀を取材した。遭難した2隻とも、大しけのなかだったが、ほかの僚船は無事だった。海の上で生死を分けるのは運ということになるのだろう。「乗員の生命を守るために最善を尽くす」という久下剛也船長の言葉が頼もしく思えた。

武揚の乗った開陽丸はどうなったのか。出航してまもなくの浦賀水道で、船団に入っていた咸臨丸が座礁、この船を満ち潮を待つて助け出すのに1日費やした。この結果、江戸湾から太平洋に乗り出すのが1日遅れ、房総沖でたまたま北上してきた台風に遭遇することになった。榎本艦隊は鹿島灘まで船足を伸ばしたものの、激しい暴風雨となり開陽丸の舵は壊れ、東に大きく流された。ほかの船も打撃を受け、咸臨丸は沈没の危機に瀕したため、蝦夷行きを断念、徳川家の支配下にある清水港に避難した。しかし、運悪く新政府軍に拿捕され、乗組員は乗り込んできた新政府軍に斬り殺され、死体は港内に投げ捨てられたという。

新政府軍は幕府軍への支援を厳しく罰していたので、清水の漁民は死体を片づけることもできなかった。そこで、漁民の窮状を見た清水次郎長が「死ねば仏、仏に官軍も賊軍もあるものか」と手厚く葬った。後年、次郎長の墓石に揮毫したのが武揚で、徳川家の禄を食んだ者は徳川家のために死すといった意味の「食人之食者死人之事」という墓碑銘を書いた。それを見た福沢諭吉が、自分は死ななかつたくせにと武揚に激怒して、「瘦せ我慢の説」を書き、幕臣でありながら明治政府に入って登用された武揚と勝海舟を痛烈に批判した。榎本の蝦夷行きをめぐるのは、そんな逸話もある。

翌14日朝、館山湾を出ると、あこがれは外洋に出て、針路を北東の銚子沖にとり、そこで、北に針路を変え、まっすぐ石巻を目指した。研修のほうも、デッキ磨き、マスト登り、帆展、「ハッピーアワー」と称する掃除…と盛りだくさんになった。マスト登りは約20メートルのマストの見張り台までロープをよじ登るもの。下さえ見なければ登れると思って

いたが、実際に試してみると、足場となるロープを見ないわけにはいかず、わずか10段ほど登ったところで、私はギブアップした。マスト登りに挑戦したなかで、私以外に挫折したのは小学4年生の男の子だけで、70歳を超える人たちも含め、みな見張り台からの景色を堪能していた。私の言い訳は「私の握力では、とても私の体重を支えきれないので」というものだったが、とても説得力があったようで、みなうなづいていた。



甲板そうじ

夕食後、「オール・ハンズ・オン・デッキ」の号令で、帆をふやした。この号令は「全員集合」という意味だそうで、就寝中でもシャワー中でも、飛び出すのだそうだ。15日未明には、風向きが変わって帆を張り直す必要があり、「全員集合」の事態になったそうだが、トレイニーを起こすのは気の毒と思ったのか、足手まといだと思ったのか、クルーがさっさと仕上げたという。

風向きと黒潮の流れにも恵まれ、320馬力のエンジンだけでは時速8・5ノットのあこがれが11ノットで北上した結果、15日夕には石巻港外に到着、そこに碇を降ろして朝を迎えることになった。3日目の夜は、甲板上で班対抗の運動会などで盛り上がった。翌朝は、石巻ヨットクラブの船の出迎えで、しずしずと石巻港に到着した。

榎本艦隊は出航5日後の24日ごろから、仙台湾に到着しはじめたが、武揚の乗る開陽丸は舵が壊れたうえ東に大きく流されたこともあり、27日ごろにたどりついた。武揚は早

速、フランス軍事顧問のブリュネを伴って仙台に赴き、仙台藩主に謁見、奥羽越列藩同盟の約束に従って新政府軍と徹底抗戦するよう説いた。しかし、河合継之助の指揮する長岡城は落城、米沢藩も新政府軍に帰順していて、仙台藩でも恭順派の力が強まっていて、武揚らの説得に応じなかった。9月半ばになると、仙台藩は降伏を決め、会津城も陥落した。

舵の修理のため牡鹿半島の折ノ浜（元石巻市）に移っていた開陽丸は、仙台藩の説得をあきらめ、10月12日から13日にかけて出航、宮古で薪水を補給したのち、蝦夷地に向かった。会津を攻め落とした新政府軍は、武揚が滞在していた石巻まで到達したが、一足違いで武揚は船出していた。

武揚が石巻で投宿したのは、石巻の豪商、毛利屋利兵衛の家で、その柱には、煮え切らない仙台藩の態度に怒った土方歳三が斬りつけたという刀傷が残っているという。この家は今年1月まであったが、老朽化が進んだため解体され、刀傷のある柱は、現在の所有者が切り取っていまも持っているという。

武揚と石巻とは浅からぬ縁ということになる。毛利屋利兵衛の孫、毛利総七郎は美術品や工芸品の収集家として知られ、総七郎の孫である毛利伸さんは現在、運動具店を営むかわら、毛利コレクションを管理、石巻市も毛利コレクションを常設で展示する準備をしている。武揚が宿泊した旧毛利邸を所有していたのは市役所職員の佐藤和夫さんで、財政課長などを歴任、私の取材先でもある。



あこがれの旅を終え、石巻の大地を踏みしめてみると、この地域の歴史と現在を知る道しるべでもある榎本武揚の目で、あらためて石巻を見てみようという思いがしてきた。

石巻港に接岸した「あこがれ」